



# 志度高だより 一飛翔の窓一

第107号  
(H22.9.10)

「愚痴もいいが…」

酒飲んでちょっと酔いが回ってくると、ぼろぼろ愚痴る人がいる。ストレスの多い世の中、たまには愚痴の一つや二つ言いたくなるというものだ。しかし困るのは、のべつ幕なしに愚痴る連中だ。こっそりあなたの周囲を見回してください。いましたか、やっぱりね。やれ上司が認めてくれないとか、俺だけなんでこんなに仕事が多いんだとか、あいつが出世するのはおかしいとか、とにかく口を開けば愚痴るのだ。まるで仕事のようにして。必要以上に愚痴るのは本当に見苦しいし聞き苦しい。ともすればその人の人格が疑われる。中には不当な扱いを受けるばかりか、才能の芽さえ摘み取られ、将来に暗澹とした気持ちしか持てない人も少なくない。ところがそう言う人はどちらかと言うと、定規のように真っ直ぐな正直者で、その上辛抱強いので自分の置かれた状況に臍を噛みながらも、じっと耐えているケースが多い。

昔はネイチャーウォッチング (nature-watching) をよくしていたが、最近ではマンウォッチング (man-watching) もよくする。前者は心が安らぐ。後者は人間の妙を教えられる。

愚痴の名人とか文句たれをよく観察してみると、共通点が見えてくる。①自分に甘く他人に厳しい、②無責任で困難な仕事となるとなんだかんだと言い訳を付けて逃げる、③他者への思いやりに欠ける、④無駄な努力はしない (無駄と思える努力こそ血となり肉となる)、⑤些事に拘泥し核心が見えない、⑥小金にうるさい、⑧協調性がない、⑨仕事が荒い、等々挙げれば切りがない。

こんな話を聞いた。ある男がいて、彼は能力は高いが怠慢で愚痴ばかりこぼす。それを見た親方は、ある日男を呼んだ。親方はぐっと男を見据え「俺の知り合いに寺の住職がいる。そこに行って修行してこい」と言った。それを聞いた男は、「なんで俺なんですか。若いもんがいるじゃないですか」とふくれっ面で答えた。「お前のためだ。嫌なら仕方ない。首だ」これを聞いて男は渋々首を縦にふった。

男が行った先は山深い古びた寺であった。長年風雨にさらされ痛みもひどい。屋根は雨漏りし、本堂もところどころ染みが浮いている。山門から本堂に至る境内にも雑草が生えている。それでも本堂に鎮座した仏様はびかびかに磨き上げられ、穏やかな顔には満面の笑みをたたえている。住職は高齢で、明日にでもお迎えが来てもおかしくない。それでも落ちくぼんだ眼窩に収まった両眼には鋭い光が宿っていた。悟った顔だ。



男はさっそく用を言いつけられると思いきや、住職は何も言わなかった。翌日もそうであった。男は少し拍子抜けした。滞在は一週間。これは楽勝だ、と思った。事実、その後も住職は男を好き勝手にさせて置いた。しかしさすがに五日目になると、男も尻の辺りがむず痒いというか、罪悪感にさいなまれた。なにせただ飯を食って時間を浪費しているのだ。

男は住職と顔を合わせるのが気まずく、寺の裏に回ってみた。そこに多くの無縁仏があった。手入れがされず草が我が物顔に生い茂っていた。望まれて生まれてきたものの、人知れず死んでいった者たち。男の心に「淋しい」という言葉が生まれた。

男の手が自然に動いていた。滴る汗を拭おうともせず、男はひたすら草を抜いた。それが終わると墓を洗った。そして最後の日、住職に申し出て花をもらい墓に供した。

住職は男と向かい合っていた。濡れ縁に座した男。秋が過ぎようとしていた。山を駆け下りる風が首筋に初冬の冷たさを残した。

「ここに来たのは間違いではなかったようじゃな」住職は穏やかな口調で言った。決して説教調ではない。極めて淡々としていた。それに対し、男も恬淡と答えた。「分かりますか。ありがとうございました」男は、自分を灯明とすることで他人の力になることを知った。住職は別れ際に一言。「些細なことでも他人の為になれること、これが人生の意味であり、人としての喜びじゃ」男は深々と頭を下げ、寺を後にした。

その後、男はどうなったかって？ 聞くだけ野暮でしょう。なんならその寺に行きますか。

私も愚痴はほどほどにしようと思う。そして少しでも他人の為になることをしたいと思う昨今である。

